

## 研究授業「発達心理学 I」の実施

中 村 多 見

### Enforcement and reflection of an open class

#### “The developmental psychology I”

Tami Nakamura

#### Abstract

This paper is record of an open class performed in the Department of Early Children Education of Takamatsu Junior College.

This class is performed by developmental psychology I. The content of this class is “development of play and the friend relations”. The aim of this class is understanding the meaning and the roles of the play for a child. Moreover, it is the aim of this class to understand the childcare person’s role in play of a child.

Key words: open class, developmental psychology

#### はじめに

本稿は、平成15年度から本学保育学科が実施している授業改善のための事業「保育学科における教員の授業研究の実施」（大学教育高度化推進特別経費 平成16年 教育・学習方法等改善支援経費）の一環として行われた「発達心理学 I」の研究授業の記録である。本学科の研究授業は、今回で10回目を数える。本講義は、平成18年度としては2回目の研究授業である。

#### 1. 研究授業の日程

授業研究および検討会は次の日程で行われた。

### ○研究授業

日時：2006年12月4日（月）1校時 9時～10時30分

場所：A31講義室（西館3階）

授業科目：発達心理学Ⅰ（担当：中村多見）

### ○検討会

日時：2006年12月4日（月）5校時 16時20分～17時50分

場所：保育演習室（西館2階）

## 2. 本講義の紹介

人間の発達、生まれてから死ぬまでの一生涯を通して見受けられる。特に、乳幼児の心身の発達は著しく、一生涯の中でも類を見ない特徴を有している。そのため、将来保育者を目指す学生にとって、乳幼児の心身の発達についての基礎知識は不可欠である。したがって、本講義を通して、乳幼児の心身の発達をさまざまな側面（身体・運動、認知、情緒、言語、対人関係など）から理解し、保育者として乳幼児の発達を支える役割について学んでもらう。また、発達の中で生じる乳幼児の問題行動や、発達障害とその診断・検査についても理解を深めていく。

## 3. 「発達心理学Ⅰ」の受講生

本講義の受講生は、保育学科1年生68名と他学科生6名である。保育士資格を取得することを目的とした学生が多く、子どもや保育についての関心は非常に高い。ただし、心理学という学問への理解はまだ浅く、理論面よりも実践面の理解を促すような講義内容や目標設定にしている。つまり、普段学生が生活の中で経験するような事例や、将来保育者になる学生にとって必要性和重要性をリアルに感じ取ってもらえるような子どもや保育についての事例を用いるなど、心理学という学問を身近で理解してもらえるよう工夫している。また、テキストの補助資料となるような穴埋め形式のレジюмеを配布し、講義の重要ポイントが一目で分かりやすいような配慮もしている。

#### 4. 「発達心理学Ⅰ」の講義内容と学生の理解

	講義内容	学生の理解
第1回 (9/25)	オリエンテーション	発達心理学が保育になぜ必要かを理解する。 また、半期の授業計画を知る。
第2回 (10/2)	発達とは何か	一般的な発達の定義、規定因、原理を理解する。 また、人間の発達の特異性についても知り、 発達段階と発達課題を理解する。
第3・4回 (10/16・23)	自分をとりまく世界の認識 －認知の発達	認知（知覚、記憶、思考）の定義と発達の様相を理解する。
第5・6回 (10/30・11/6)	自分をとりまく人々との かわり－対人関係の発達	家庭を中心とした対人関係（母子・父子・きょうだいとの関係）の役割とその発達を理解する。
第7回 (11/13)	自分自身を知る －自己の発達	自己の知覚とその発達を理解する。
第8回 (11/20)	豊かな内的世界 －情緒の発達	情緒の定義とその役割、発達を理解する。
第9回 (11/27)	ことばと コミュニケーションの発達	ことばの機能と発達を理解する。
* 第10回 (12/4)	遊びの発達と友だち関係	遊びの定義と種類、発達を理解する。
第11回 (12/11)	社会的認知と社会的行動の 発達	愛他行動と道徳性の定義・発達を理解する。
第12回 (12/18)	乳幼児保育と発達	保育者の専門性を知り、乳幼児保育のあり方を理解する。
第13回 (1/15)	子どもの問題行動	子どもの問題行動を知り、その対処法を理解する。
第14回 (1/22)	さまざまな発達障害・発達の 診断と発達検査	発達障害の種類・診断とその検査法である発達検査を理解する。
第15回 (1/24)	総括（期末テスト）	-----

\*本時

#### 5. 本時の指導案

発達心理学Ⅰ	保育学科68名、音楽科6名	第10回：平成18年12月4日（月）1限
題目	遊びの発達と友だち関係	
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもにとっての遊びの意味を知る</li> <li>・ 遊びの種類と、その発達を理解する</li> <li>・ 遊びにおける保育者の役割を理解する</li> </ul>	

講義内容・学習活動・指導上の留意点	
9:00	授業開始（レジュメと出席確認表の配布）
9:05	子どもの遊びについて考える <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の子ども時代を振り返る</li> <li>・ 観察実習で観察された子どもの遊びについて振り返る</li> </ul>
9:10	事例「あそびとは？（保育実習生による報告）」
9:15	遊びの意味 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもの遊びと大人の遊びを比較して、子どもにとっての遊びの意味をまとめる</li> <li>・ 遊びが子どもに与える影響について考える</li> </ul>
9:20	ビデオ「すばらしき36ヶ月：乳幼児の発達 こどもと社会」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遊びの中で起こるトラブル（物のとりあい）を知る</li> <li>・ 遊びの中で子どもが正負両面（嬉しさや悲しみなど）の経験をしていることを知り、その必要性を理解する</li> <li>・ 子どもが正負両面の経験をするためには、適切な人的・物的環境（信頼できる親関係や見守る態度など）の重要性を知る</li> </ul>
9:40	遊びの種類と発達 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ピアジェの認知発達からみた遊び</li> <li>・ パーテンの社会的関係の発達からみた遊び（友だち関係の話題も交えながら）</li> </ul>
10:10	遊びにおける保育者の役割 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 関心を示す、認め・支え・映し返すという役割</li> <li>・ 遊びを提供し、遊びを共に楽しむ役割</li> <li>・ 子どもの遊びを仲介する役割</li> </ul>
10:25	出席確認表への記入 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもの頃にした遊びについて</li> <li>・ 授業へのコメント</li> </ul>
配布物	出席確認表、レジュメ、参考資料（遊び観察尺度）

## 6. 授業を終えての自己省察

今回、授業者にとっては初めての研究授業であった。これまで授業方法について指導を全く受けたことがなかったため、とても緊張して研究授業に臨んだ。また本講義を受講している学生にとっても初めての研究授業であり、授業者同様、緊張した様子であった。そのため、いつもなら授業者と学生との間にある双方向的なやりとりもあまりなく、どちらかというとなり一方的な講義になってしまった。また、日頃気をつけているつもりの口癖も多々見られ、聞き取りやすく分かりやすい話し方を身につける必要性を感じた。

以下に、研究授業後に行われた検討会で指摘を受けた事項について自己省察する。

#### (1) 学生の遅刻について

本講義は、月曜日の1限目ということもあり、比較的學生が落ち着いて受講できる時間帯に設定されている。ただし、授業開始までにかかる時間は少々長く必要で、その原因は學生の遅刻である。第1回のオリエンテーション時に、遅刻厳禁の説明はしているものの、徐々にその意識は薄れていくようである。毎回の授業でおおよそ2、3名の遅刻が見受けられるが、授業時間を割いての指導はしていない。あまりにも遅刻の重なる學生については、授業終了後に個別指導をしている。

しかし、學生の遅刻による授業開始の遅れは授業者の責任である。本来ならば、時間内に着席すべき常識を學生に徹底して指導していく必要があり、今後は厳しい態度をもって學生と向き合っていきたい。

#### (2) 講義内容と方法について

本講義の内容は「遊びの発達と友だち関係」という、本来ならば2回の講義に分けて行ってもよい内容を1回の講義で行った。その理由としては、シラバス通りの授業展開をする必要があったためだが、それが學生の確かな学びを支えているのかには疑問が残る。しかし、多くの内容を短い期間内で學生に教授するためにたくさんの工夫も考えている。

例えば、テキストの補助資料としてのレジメの配布である。これは、テキストの中でも特に重要な箇所についてまとめたものであり、一目で重要な単語が分かりやすいように穴埋め形式になっている。ただし、検討会ではこうした形式のレジメが學生の学びを安易なものにしてしまっているのではないかと、との指摘を受けた。確かに、穴埋めの時にだけ話を聞いて、それ以外の時には他事をしている學生も見受けられる。授業者としては、とても残念に感じているものの、これまでそういった學生に対して具体的な指導をしたことはない。ただし、そういった學生の目や耳をこちらに向けさせるような授業を展開しようといつも心がけているのは確かである。

次に、OHCを使ったテキストの提示は「學生にも分かりやすい」と高く評価された。本講義は、テキストに沿って展開されるため、毎回テキストの重要箇所にはアンダーラインを引いてもらっている。それを分かりやすく學生に示すためには、言葉よりも視覚的に見ることができた方が効率よく、なおかつ學生の学ぶ作業を促しているように感じている。

る。ただ講義を聞くだけでなく、学生自身でアンダーラインを引いたり、メモを取ったりする作業を通して、学びが促進されることを期待して取り入れた方法である。

最後に、今回の研究授業ではビデオを使った。これは、子どもの遊びについての学生の理解を深めるために効果的であると考えたためである。研究授業前に、子どもの遊びについて学生に尋ねたところ、「楽しいもの、愉快的なもの」といった遊びのポジティブな面の印象を多く持っていることが判明した。確かに、遊びは楽しく愉快的なものではあるが、それだけではなくネガティブな面（けんかや物のとりあいなどのトラブル）もある。そのことを学生にはよく理解してほしかったために、ビデオを用いて授業を行った。研究授業でビデオを見た学生の反応はとて良く、授業者の目的は達成されたように思う。ただし、検討会でも指摘されたことであるが、ビデオの内容についてもっと深く詳しく学生の理解を促していけば良かったように感じている。また、ビデオを見るときメモ取りについても学生に一言指導しておくべきであった。ただ見るだけに止まってしまったことに反省している。

### （3）保育との関連づけについて

本講義は、人間の発達についてさまざまな側面から講義を行っている。その中で、いつも気をつけていることは、“発達心理学と保育の関連づけ”である。毎回の講義で話す事例など、子どもや保育、実習にまつわるものを多く取り上げ、学生の学習意欲を高めるよう努めている。そして、今回の研究授業でも、子どもの遊びを保育者としてただ見たり楽しんだり微笑んだりしているのではなく、保育者として“子ども理解”が深められるような視点を提供するべく、「遊び観察尺度」を参考資料として学生に配布した。ちょうど観察実習の最中にある学生にとっては関心も高いようであった。しかし、時間の都合上あまり多くの説明を行えなかった。また、授業者自身の保育への経験不足も影響して、効果的な教授もできなかった。

今後とも、心理学という学問が与える知識や技術が、子ども理解を深め、保育において必要なものであることを伝えていく。そのため、講義内容に合った時間の確保や授業方法の向上に日々努めていきたい。

おわりに

今回の研究授業は、授業経験の未熟な授業者にとってとても有意義な経験になった。心理学という授業者自身が長年習得してきた学問についての理解はある程度自信はあったものの、それを授業を通して学生に教授するという事は全く経験したこともなく指導を受けたこともなかったため、本学に赴任して3年間模索しながら今日まで授業を行ってきた。そのため、今回の研究授業を担当し、多くの気づきを見出すことができたように思う。今後は、それらの気づきを活かして、より学生の確かな学びを支えることができるような授業を実践していきたい。

最後に、研究授業にご協力頂いた学生をはじめ、多くのご意見ご指導をくださった諸先生方に心より感謝申し上げます。

#### 参考文献

繁田 進編著 「乳幼児発達心理学 子どもがわかる好きになる」 福村出版<sup>\*1</sup>  
堀野 緑・濱口佳和・宮下一博編著 「子どものパーソナリティと社会性の発達」 北大路書房  
無藤 隆・岩立京子編著 「保育ライブラリ 乳幼児心理学」 北大路書房  
山内光哉編 「発達心理学（上）周産・新生児・乳児・幼児・児童期」 ナカニシヤ出版

<sup>\*1</sup>本講義の使用テキスト

\*以下は、本時で配布したレジюмеである。

## 7章 遊びの発達と友だち関係

### 子どもは遊びながら生きることを学ぶ

フレーベルによると、「子どもの遊びとは、子どもの内面に育ってくるものの自主的な表現であり、この自主的な表現活動を通して外界にかかわることで、子どもは自分の外の世界や自分自身を知り、同時に子ども自身の心身の能力を高めていく」と述べている。

子どもたちは、「今ここでできること」を遊びのなかで実践し、「これからできること」を遊びのなかに発見していく。これを毎日繰り返すことで、子どもたちの身体や運動機能、知能、認知、情緒、言語、社会性は発達し、生きるために必要な「調和のとれた心身」へとたどりつくのである。

### 遊びの特質

#### 事例 あそびとは？（保育実習生による報告）

子どもにとってあそびはとてつもない楽しさだと授業で習ったので、伝承あそびのひとつを子どもたちに伝えていた。ところが、しばらくして、数人の子どもたちに「先生、そろそろ遊んでもいい？」と聞かれ、非常にショックを受けた。私は、子どもたちと、遊んでいるつもりだった。なぜ、子どもたちは、私とのあそびを、あそびと思わなかったのだろうか。

- ① 自由で自発的な活動である。
- ② おもしろさ、楽しさ、よろこびを追求する活動である。
- ③ 身体の鋭敏さを養う、知識を蓄えるといった目的のために遊ぶのではなく、その活動自体が目的である。
- ④ 遊び手が積極的に関わる活動である。
- ⑤ 現実世界の価値基準やルールに縛られず、自由自在に主観性を駆使し、実際には起こりえない不合理やナンセンスを創出し、その楽しさを味わう活動である。
- ⑥ 身体や運動機能の発達だけでなく、知能や言語、社会性といった精神機能の発達とも相互的に関連している。

### 遊びの種類と発達

#### ☆ピアジェの認知発達からみた遊び☆

##### ① 感覚運動的遊び（破壊遊びを含む）

感覚運動期にある乳児期の子どもは、自らの（ ）と（ ）を用いて外界の情報を得る。その際に行われる活動のことを「 」という。指を口に入れたり、体の部分を触るなど、自分の体を探索することから始まり、ガラガラをふって音を出したり、まわりの物をつかんだり投げたりして自分の行動に対する結果を楽しむようになる。感覚運動的遊びを通して、物の使用や外観、物同士の類似性や相違、人と物との関係性について発見し学習する。

## ② 象徴遊び（構成遊びを含む）

前操作期にある幼児期の子どもは、目の前にはない対象・事物・行為を心の中でイメージできるようになり（ ）、ある物をそれとは異なる物にたとえることができるようになる（ ）。また、記憶能力の発達とともに延滞模倣も可能になるため、この時期には空想遊びやふり遊び、ごっこ遊びといった「象徴遊び」が盛んに行われるようになる。象徴遊びは、子どもの（ ）獲得を促すとともに、社会性の発達も助ける。また象徴遊びには、子どものさまざまな（ ）や葛藤を満足させたり解消させたりする働きもあり、自分の情緒を探求・制御（コントロール）できるようになる。

## ③ ルール遊び

前操作期後半から具体的操作期になると、それまでの活動自体が目的である（＝無目的な）遊びから、勝敗や成功失敗、優劣などを含む目的のある遊びが行われるようになる。このようなゲーム性の高い遊びを「 」といい、2人以上で成立する社会的遊びである。友だち同士で遊ぶことは楽しさを倍加させる一方、衝突や対立による葛藤も経験させる。こうした遊びの正負両面を経験し、それぞれに伴う感情（達成感や有能感や充実感、挫折感や劣等感）を知ることで、子どもは鍛えられ、積極的に効果的な社会的やりとりや（ ）とのつながりを深めていく。

---

### 感覚運動期（誕生～2歳）

感覚と運動的活動を通して外界の事物を認知。物の永続性の獲得。

---

### 前操作期（2歳～6, 7歳）

身振り動作や言語を用いた象徴的な思考ができるが、まだ非論理的である。他者視点をとることが困難なこの時期の性質を、自己中心性という。

---

### 具体的操作期（6, 7歳～11歳くらい）

知覚的な特徴に左右されず事物の等価性を判断できる保存の概念が成立。具体物に即していれば、論理的な思考が可能になる。

---

### 形式的操作期（11歳くらい以降）

抽象的な思考が可能になる。具体物がなくとも、論理関係だけを思考の対象として推論できる。

---

## ☆パーテンの社会的関係の発達からみた遊び☆

- ① ぼんやり（何もしない行動）：その時々に興味を引かれたものを眺め、それがなければ、何もせずぶらぶらしている。2,3歳以下でわずかに見られるだけである。
- ② （ ）：他の子の近くで遊んでいても、互いにやりとりすることはなく、自分の遊びに専念している。乳児期によく見られ、年齢とともに減少していく。
- ③ 傍観的行動：他の子の遊びをそばで見ている。時々相手に話しかけることもある。2歳半ごろ頻度が高くなる。
- ④ 平行（並行）遊び：他の子の近くで、同じようなおもちゃを使って遊ぶ（お絵かき、折り紙）が、互いのやりとりはない。2,3歳で高い頻度を示す。
- ⑤ （ ）：同じ内容の遊びを複数名で同時に行い、おもちゃの貸し借りやその遊びに関する会話がある。ただし、遊びの中での役割分担はみられない。年齢とともに増加する。
- ⑥ （ ）：共通の目標をもって、協力したり役割分担したりして組織的に遊ぶ。指示を出す子どもと、それにより動く子どもが現れはじめる。3歳以下では見られず、3歳以降年齢とともに増加する。

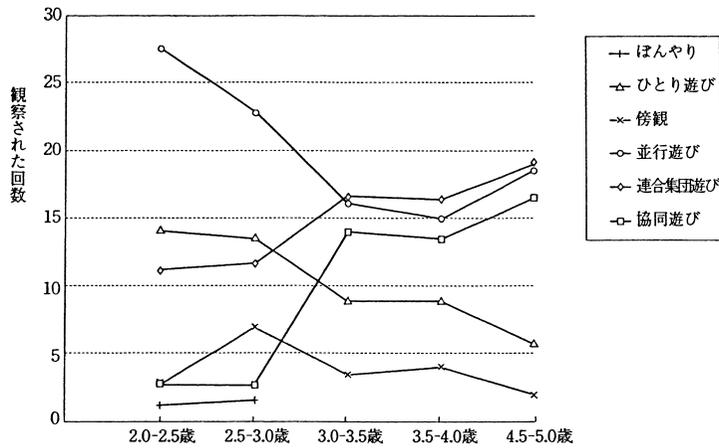


図 10.3 遊びの社会的類型の年齢変化 (Parten, 1932)  
(各年齢水準につき6名の子どものそれぞれ60回の観察例数)

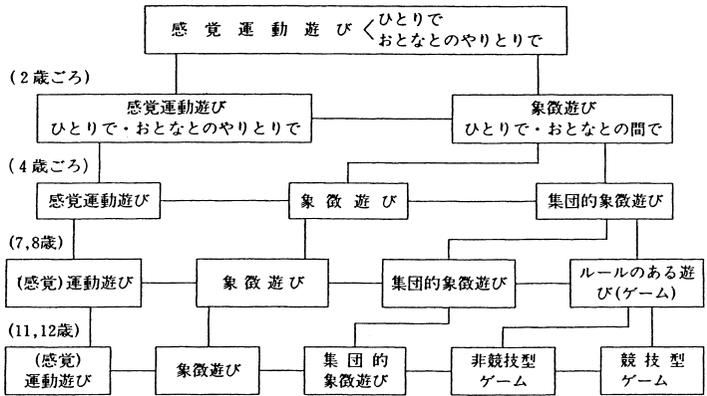


図 10.2 遊びの発達の構造図 (清水, 1983)

### 遊びにおける保育者の役割

遊びは、子どもの自由で自発的な活動であるが、保育の場では「ただ遊ばせておけばいい」という訳にはいかない。保育者は、個々の子どもが、何を楽しんでいるのか、この遊びで何を体験しているのかを見つめていく必要がある。そうすることで、子どもが育んでいく課題を見出し、適切な環境を構成していくことができる。そして、幼稚園や保育所は、子どもたちが生きていくために必要な「調和のとれた心身」を発達させる場となる。

- ① 関心を示す、( ) という役割
- ② 遊びを( ) し、遊びを共に楽しむ役割
- ③ 子どもたちの遊びを( ) する役割

高松大学紀要  
第 48 号

平成19年 9月25日 印刷  
平成19年 9月28日 発行

編集発行 高 松 大 学  
高 松 短 期 大 学  
〒761-0194 高松市春日町960番地  
TEL (087) 841 - 3255  
FAX (087) 841 - 3064

印 刷 株式会社 美巧社  
高松市多賀町 1 - 8 - 10  
TEL (087) 833 - 5811